論　文　要　旨

区分	甲 乙

呂　娜（ろな）

論文題目

永井荷風の比較文学的研究――儒学・中国を視座として――

論文要旨

本論文は、儒学的な文化・思想から荷風文学への影響と、中国における荷風文学の受容の仕方という二つの方面から永井荷風の比較文学研究を試みたものである。序章、第Ⅰ部（荷風文学に見られる儒学の影響）、第Ⅱ部（中国における荷風文学の受容）、終章の四つの部分から構成されている。序章に続き、第Ⅰ部は第1章、第2章、第3章と第4章、第Ⅱ部は第5章と第6章からなり、最後に終章が置かれている。以下では、本論文の各章で提示した内容の要点をまとめる。

第1章では、荷風の教養、青年期の思想の混乱、矛盾や変遷、漢詩文を中心とした読書遍歴と創作を考察し、荷風文学にみられる「儒学」思想を研究する土台を作った。荷風は儒学の家に生まれ育った文学者である。その持っている漢詩文の素養は、同世代の作家に比べると、異色なものである。ゾラをはじめとするフランス文学に熱狂的に傾倒した時期もあるが、青年時代とほぼ重なった遊学時代の思想の混乱、矛盾や変遷を経て、その文学的趣味や価値観はついに東洋に回帰した。特に、大正後期から昭和初期にかけて、6年ほどの長い持続期間中は、「下谷のはなし」の創作、改作をめぐって、99種に及ぶ、驚くほどの数量の江戸儒者の詩文を集中的に耽読していた。こうして、儒者に近い文章感覚、思考形式、感受能力が養成されたと考えられる。また、荷風文学にみられる中国文学の関連するものもかなり多い。漢詩文の素養は、荷風の一生を支配し続けているものだと考えられる。

第2章では、原始儒学の「仁」について説明し、儒学思想への批判と反抗、随筆や小説における「仁」を考察し、荷風文学にみられる儒学思想「仁」を論じた。儒学思想はかなり複雑な思想体系で、歴史的な発展に伴い、政治化した儒学、倫理道徳規範としての儒学、人生哲学としての儒学など、多方面の内包を持っているが、中心には「仁」の思想が存在している。「仁」は、「人を愛する」ことであり、お互いの「思いやり（同情）」を基本とする。「仁」を完成させるには、「己の欲せざる所は人に施すことなかれ」というように相手の立場に立って考え、克己復礼、孝悌、言葉や行いの慎み、謙譲、誠実などの行動規範に従い、絶えず自分の修養を高めなければいけない。儒学に対する荷風の態度は、批判と称揚との「両極端」を持つものである。「狐」、「一月一日」などの作品からみれば、荷風は、主に儒学思想を源とし、武士道によって強められた父権や専制に反抗している。その一方、「妾宅」、「礫川徜徉記」、「草紅葉」、「雪の日」、「地獄の花」、「墨東綺譚」などには、思いやり、同情、克己、誠実、謙譲など、「封建時代の厳しい

教育を受けた人達の美徳」即ち「仁」を中心とした道徳を心から好む荷風の考え方が見られる。

第3章では、儒学思想の「和」を論じた上で、日記、随筆と照合しながら、「墨東綺譚」を中心に荷風の反戦思想を検討し、儒学思想の「和」からの影響を明らかにした。儒学思想の「和」は、「和為貴」、「君子和而不同，小人同而不和」、「天時不如地利，地利不如人和」などという聖人の訓示のとおりである。できるだけ他国との戦争を避けることを主張し、武力より仁政が重要視される反戦・平和思想である。荷風小説にみられる反戦思想を論じる際、中日両国間の本格的な戦争が始まる前に発表された『墨東綺譚』(1937)は極めて重要な意義がある作品だと考えられる。小説の主人公「わたくし」の「大江匡」という名前は、荷風の家系と知的優越を示していると同時に、『論語』憲問第十四にある「一匡天下」という典に収束されている平和、仁政思想を示唆する隠喩だと考えられる。また、戦争を鼓吹し、煽るラジオへの嫌悪からも武断政治に反対する荷風の考え方が窺える。さらに、小説の後についている「作後贅言」では、荷風の戦争への恐怖や嫌悪が婉曲的に表されている。「墨東綺譚」(1937)とほぼ同じ時期に書かれた作品には、随筆「十九の秋」(1934)と「西瓜」(1937)がある。この二つの作品では、戦争への反対と中国への好意的な感情が表され、作者荷風の教養と道徳を構成する要素としての儒教が言及されている。テキスト分析をした結果、「墨東綺譚」にみられる「和」は、儒学思想の「和」に深く通じるものだと確認できた。

第4章では、儒学思想における「修身斉家治国平天下」という精神を説明し、荷風の外祖父鷲津毅堂と父永井久一郎に対する態度を究明し、言論統制が強まる一方である情勢の中で発表した「花火」をめぐって文学者としての荷風の態度、創作手法を探り、さらに「墨東綺譚」及び日記を中心に、荷風にみられる「修身斉家治国平天下」という精神を論じた。儒学思想の「修身斉家治国平天下」は、儒者の実践を指導する基本的な思想で、天下の治乱興衰を己の責任とする精神である。自らが積極的に国の政治に関与する知識人の行動、人格と思想を支えているものである。荷風の外祖父と父は、どちらも儒学を修め、高級官吏を務め、旧幕府や明治国家の政治に関与していた志士である。荷風の生き方及びその小説、日記や随筆などを合わせて検証した結果、その外祖父と父への共感と敬慕が明らかにされた。度々発禁処分を受け、大逆事件のような思想・表現の弾圧を受け、厳しい社会情勢の中に身を置いても、荷風は作家としての責任感をちゃんと持っている。日中戦争勃発直前に発表された「墨東綺譚」は、「花火」以来の、江戸戯作者という外装のなかに作者の真なる感慨、憂憤、批判、諷刺などをしのばせる創作の手法と、民の無覚醒と為政者の暴悪をめぐる荷風の社会思想との結晶である。結局、荷風は超然とした態度でその文学創作を進めていたわけではなく、その批評的な文字の行間には祖国の行方と庶民の生活を憂える熱い愛国心が込められている。外祖父毅堂から父久一郎へ、さらに父久一郎から荷風へと、「修身斉家治国平天下」という儒学的な精神は、確実に受け継がれていると言える。

第5章では、荷風文学の中国語訳を対象にして、荷風が文壇に登った当初から今日にかけての中国における荷風文学の翻訳、出版及び主な翻訳者の情報などを考察し、検討した。中国における荷風文学の紹介と翻訳は、戦前と改革開放以来の二つの時期に分けられる。戦前には、中国で荷風やその小説があまり高く位置づけられていなかったゆえ、紹介や翻訳が少なかった。この時期、一番早く且つ多く荷風文学を中国に紹介・翻訳したのは周作人であった。小説より短い随筆の方が選ばれ、中国語に翻訳され、雑誌

や新聞に発表された。中国の文人と共通している感じかた、考え方や資質の「類似性」が、受け入れられた原因だと考えられる。その後、40 年ほどの長い間、中国の文壇が荷風文学に注意を払っていなかった空白期間があった。改革開放以来、中国社会の発展につれて、外国文学が大量に中国に取り入れられてきたと同時に、荷風文学も次第に注目されるようになってきた。日本文学史における耽美主義の代表的な作家や作品の紹介をきっかけに、中国の翻訳者が荷風文学に関心を持つようになった。荷風作品が数多く中国語に訳され、しかも、次第に度重なって訳されるようになった。これは、受容者側の中国社会の発展と密接な関係があると考えられる。逆に、中国における荷風文学の受容のプロセスから中国の知識人の考え方や社会の変化が窺える。

第 6 章では、翻訳者の荷風研究、漢学や中国を視点とした荷風研究、その他の荷風研究という三つの部分にわけて、中国における荷風研究を考察した。中国における荷風文学の研究は、改革開放以後徐々に成果が挙げられるようになった。戦前、中国では、荷風文学を紹介した文章は見られるが、整った研究論文は存在しなかった。主に片上天弦の言う「享楽」を援用し、荷風を享楽派として紹介している。1930 年代に入ってから改革開放までの間は、戦争や政治などの原因で、荷風に関する紹介や研究は空白であった。本論の主眼が中国古典文学から荷風文学に染み入った中国文化の儒学思想に置かれているので、改革開放以後の、中国文学の素養を持つとともに荷風文学のテキストを綿密に読んだ翻訳者による荷風研究と、漢学や中国を視点とした荷風研究を詳しく検討した。譚晶華や李遠喜をはじめとする翻訳者による研究論文は、荷風文学の複雑さあるいは内包の豊さを正確に捉えており、その内包している社会的な要素を鋭敏に意識している。21 世紀に入ってから、中国文化に対する自意識や自信が強くなるにともなって、荷風文学における中国の文学・文化に関連する要素を論じる論文が現れた。総じていえば、中国では、荷風に対する高い評価が圧倒的に多く、唯美主義または芸術至上主義という特徴のほかに、作品に内包されている思想や中国文学・文化の要素などが注目されており、日本と方向の違っている荷風研究がなされている。

終章では、出世作「地獄の花」から晩年の集大成作「濹東綺譚」に至るまで、小説、随筆、日記など様々な荷風作品には、仁、和、修身斉家治国平天下という儒学的な思想が見られるということを改めて指摘した。荷風文学は、中国の儒学的な文化・思想からの影響を受けている。荷風文学の内包している思想性は、当時の言論統制などのせいで曖昧に表されており、見逃されやすいものであるが、中国ではかえって鋭敏に意識され、受容されている。日本近代文学史における唯美主義派の代表的な作家という荷風の位置づけを超えて、その文学を新たに評価すべきである。

論文審査結果の要旨

呂娜氏の博士学位請求論文の本審査会は、令和4年2月13日11：00～12：15にリモートで開催された。最初に呂氏による論文内容の発表が30分間あり、その後質疑応答を行った。審査委員からは、表現上の問題点の指摘をはじめとして、先行論文の取り扱い方や論文中の事実についての確認、研究方法や内容の特色・意義についての質問等が行われたが、いずれに対しても申請者からは適切な回答がなされた。外国人であるゆえの表現上の軽微な問題点は若干あったが、修正は十分可能と判断された。また、審査委員からは、内容および方法上の意義を評価する発言もあり、審査委員3名の全員一致により「合格」と判定した。

同日13：00～13：50には公聴会が、同じくリモートで行われ、呂氏の発表の後参加者との質疑応答が行われた。ここでの応答も適切であった。公聴会終了後、古川専攻主任から審査委員会が合格の判定を下したことが説明され、公聴会に参加した人間科学専攻所属教員全員の賛成が表明された。

審査委員会の評価は以下の通りである。

1．永井荷風は、耽美享楽の作風や花柳狭斜の風俗を描いた点などが注目されがちだが、家学としての儒学の影響を深く受けていたことを明らかにした。こうした点への部分的言及はすでに行われているが、それを詳細に検討し、個々の作品から実証的に跡付けている。荷風に影響した中国と江戸の漢詩・漢文をまとめるなど、着実な研究が行われている。また、儒学の本質への考察に基づいて荷風への儒学の影響が論じられ、それによって荷風の儒学に対する二律背反的な態度が整理され、位置付けられている点も注目に価する。

2．中国における永井荷風研究状況が網羅的にとらえられ、全体が見渡せるように整理されている。これは日本側の研究者には見えなかった点であり、研究の情報的な意義も大きい。さらに、情報を整理するだけでなく、受容者側の在り方を反映して荷風の捉え方も変化していることを指摘して、作品解釈者と作品との本質的関係に触れている点も意義深い。

3．第Ⅰ部と第Ⅱ部がそれぞれ独立の課題として扱われ、両者の有機的関係が見えにくいのではないかという質問があったが、その点は今後の課題であろう。

4．本論文は、荷風における儒学の問題を、実証をふまえて内在的に考察しており、研究方法に関する十分な配慮と綿密な資料調査があり、博士学位請求論文として備えるべき基準を満たしていると判定した。

以上